

法人化3年目、高知大病院が地域貢献へ動く サービス産業創出事業への取り組み始まる

倉本病院長の創意工夫で活発化

独立行政法人化されて3年目になる全国の国立大学附属病院が「経営の自立」と「医療の質の向上」の両立を目指して苦闘を続けている。その中で高知大学医学部附属病院（倉本秋院長・605床）は院長裁量権を駆使し、創意工夫に富んだ運営で成果をあげている。PET-CTなど高度医療機器の積極導入、若手医師らの給与改善、教授選考の独自性発揮、地域貢献に直結するデータベース構築、新規サービス産業創出事業の立ち上げなど、地方大学らしい地域密着型の動きが注目されている。



倉本秋高知大病院院長

親方日の丸的経営からの脱却

倉本秋院長の病院運営の基本方針は「経営効率を高め自立性を確保、医療の質と経営の質の両立を目指す」。DPC下の限られた医療資源で最大の医療効率を上げることに腐心する。4月のPET-CTの導入に当たっては割賦リースを利用して15億円を自己調達した。「親方日の丸」からの脱却である。それが地域貢献に直結する。この3年間で同院の医療機器購入額は3倍に跳ね上がった。それが医師や技師のやる気を引き出した。一方、院長裁量で思い切った職員の給与改善を行った。年間で研修医401万円、大学院生（医員）377万円、レジデント410万円、指導医420万円、病院助手510万円、助手600万円に引き上げた。この財源1億2000万円はすべて自前でひねり出した。これにより大学で学位をとりながら専門医の資格をとるまで一定の生活は保障される。外に出ている大学に戻ってこられる環境が整えられた。実際この4月には25人の若手医師が戻ってきた。

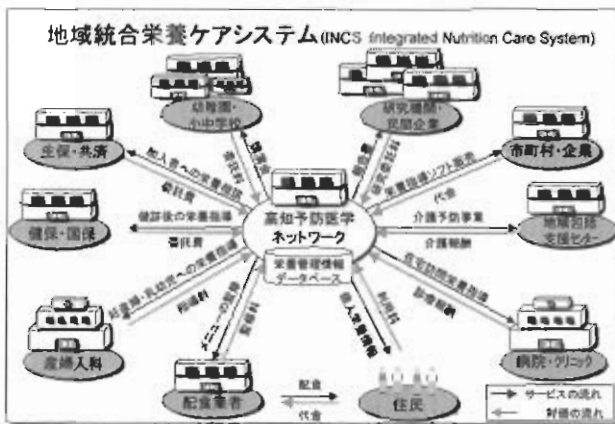


高知大学医学部附属病院

それだけではない。多くの非常勤看護師を常勤者と同じ処遇とし、「スーパーナース」という独自の称号をつけて、やる気を引き出した。この財源は1億2000万円。また、総合リハをとるためPT、OT各4人、計8人を採用した。人件費は上がったが、売り上げは4000万円アップした。このようにここ3年間ですべての職種を増員し、処遇も改善した。「人がいなければ、医療の質も収入も絶対に伸びない」。これが倉本院長の基本姿勢だ。独法化は厳しい反面、経営の創意工夫の余地は十分ある。国立大学間の格差は年々開いている。

高知予防医学ネットワークの立ち上げ

「地方大学はあくまでも地域に密着し、地域に役立つ研究や事業に取り組んでいくべきだ」。高知大学、同医学部附属病院、高知医療センターが中心になって今春2月に設立された有限責任中間法人「高知予防医学ネットワーク」（会長：相良



祐輔高知大学長)は経済産業省が昨年全国公募した「サービス産業創出支援事業」(05年度、06年度)に採択され、急性期医療から退院後の在宅療養生活までに必要な栄養管理情報を共有化する栄養管理システム「地域統合栄養ケアシステム(INCS: Integrated Nutrition Care System)」を構築しつつある。本年度末までに保健・医療・介護など多様な事業者が「栄養」を切り口にした新しい事業モデルでのサービス産業の創出につなげていく。05年度では約670万円の補助金で試行、06年度は約7000万円の補助を受け本格的なシステム構築に入っている。これが完成すれば地域一体型の栄養管理モデルとして全国発信できる内容に

なると期待されている。

この「高知予防医学ネットワーク」は専任職員5人を含め13人の体制で生まれ、県内のソフト会社と共同で事業の土台となるデータベースを構築、これをもとに3月末までに健保組合、病院、配食会社、自治体などに向け4つの栄養関連サービス事業が開始される。

倉本秋高知大病院長は「こうした研究や事業は高知のようにあまり人が移動しない地域では『コホート研究』としてやりやすい。ぜひ成功させたい」と熱意を込める。大学病院の地域貢献のシンボリックな事業とも位置づける。

新任の第一外科花崎和弘教授の教室づくり



第一外科
花崎和弘教授

この4月1日の高知大医学部教授人事で話題になったのは、3月末で定年退職した荒木京二郎第一外科教授(消化器外科)の後任に選ばれた花崎和弘教授(49)だ。専門分野は消化器外科の中でも肝・胆道・膵臓がん

の外科治療。今春東京で開かれた第106回日本外科学会定期学術集会(幕内雅敏学会長)の国際シンポジウム「肝阻血再灌流障害の知見と臨床応用」ではプロスタグランジンを使った肝切除例を発表し注目された。1956年長野県生まれ、84年新潟大医学部卒。信州大第2外科入局、同講師などを経て米ベイラー医大留学。長野、山梨両県下の病院に勤務後、2003年から今年3月まで長野県厚生連篠ノ井総合病院主任外科医長。この間肝切除約250例、胃がん、大腸がん約500例、膵臓がん約100例などの手術実績をもち、その腕は高く評価されている。民間病院の医長級から国立大学医学部教授に選ばれるのは非常に珍しいケース。

着任して半年が経つ。「高知発の優れた研究・臨床を世界へ発信、研究は英語論文で完結。教室の人事は年功序列ではなく、医局への貢献度や成果主義の導入により決定していく」など積極的な方針を打ち出し、新時代の教室づくりを進めている。現在の医局員は約15人。県内の関連病院は約30。同門会OBの協力体制も厚く、医局は明るく

活気がみなぎっている。倉本病院長も「花崎教授の着任で外科系が活性化され、最近是新患数が増え、手術件数も増加している。外来患者数は月150人前後も増えた」と期待は大きい。

花崎教授を訪ねた。「教室のスタッフも、同門会、関連病院も非常に協力的で、盛り立てて下さって感謝している。今後の医局づくりの一つのポイントは女性医師の受け入れだ。高知は女性が元氣。学生の半数近くが女性の時代。アメリカでは乳腺外科や腹腔鏡外科は女性医師が多く、外科全体でも30%ぐらいになっている。高知でも女性医師が継続して仕事のできる体制をつくって医局を充実させていきたい」。

また、入局者の確保については、「いまの若い人はやる気はある。外科の魅力をもっと一生懸命伝えていけば必ず入ってくれる。そのためにはできるだけ外国に行かせる環境をつくりたい。自分のところだけに囲い込むことをせずに、なるべく若い人の希望は通したい」。全国の大学の中でも北大の腫瘍外科には今春12人も入局したという。外科志望は少なくなったとはいえ、「入るところには入っている。外科の魅力の伝え方の差だ」という。

「とにかく教室員を増やし、優秀な外科医を輩出していきたい。それが大学の最大の地域貢献だ」。高知大第一外科はこうして着実に、いかにも高知らしい教室づくりが進められ、新しい大学のイメージもつくられようとしている。